

八戸市における市民のポピュラー音楽演奏活動を支える社会基盤

山田晴通

青森県八戸市において、市民の自発的活動として始まった「フォークジャンボリー」、ないしは「ナリキリ」の文化が、最終的に市が主催する行事として制度化されていった過程は、山田(2025)において報告した。そのような活動を支えた社会的基盤、あるいは、地域資源は何であったのかを検討するため、物理的な装置として把握できるものと、言説の中に窺える地域的文化資源という二つの側面から検討をおこなった。

地方都市における音楽産業の成立基盤、可能性を検討した先行研究は、ライブハウス等のライブ会場、録音や練習の場としてスタジオ、さらに楽器店や放送局などが、「都市の文化的基盤のひとつ」、「情報、知識の交換ができる「場」と捉えられ、都市内における分布などを論じてきた。産業の成立に至らない水準においても、アマチュアである市民による文化活動としての音楽演奏の持続的な展開には、それを支える様々な「場」が必要であるし、そこには行政や、商工会議所、青年会議所など半ば公的性格の地域的組織が、アクターとして関わってくる。

八戸市では、アマチュアの活動の場となるライブ会場は、500人規模以下の規模であるが、特に50人にも満たない多数の場所で、日常的にライブの機会があることや、市が「まちづくり」の文脈の中で、積極的にライブ会場や練習場所の提供、情報提供に関わっている点などが注目される。

また、担い手の世代や、音楽ジャンル別に特徴をもった形で、数十名規模の比較的小さなライブハウスや、さらに小規模な飲食店などが、エンスージヤストたちが交流する「場」として機能しており、そうした「場」はほとんどの場合において、生業的性格の経営によって支えられている。さらには、恒常的な施設としてのライブ会場とは別に、各種のイベント、祭礼、その他の場面で、屋外なども含めた仮設の舞台で演奏が求められる機会も多い。

音楽の聴取形態の変化の波を受け、本格的なレコード店（CD小売店）は消滅したが、地元の楽器店は、音楽教室の運営や、学校教育の場における吹奏楽などへの支援も含め、幅広い事業に取り組んでいる。

客観的な妥当性の検証は困難であるが、音楽関係者への聞き取りの中では、八戸市においてアマチュアの音楽活動が盛んな理由として、港町の気風（漁船員の「豪遊」の受け皿＝歓楽街としての性格）、三沢の米軍基地の存在（かつては多数の米兵が来街した）、吹奏楽の小中学校への浸透などを上げる言説が聞かれた。さらに、同じ青森県内における、津軽と南部の気質の違いといった認識と結びつけて、オリジナリティよりもコピー、「ナリキリ」を重視する文化があるとする声も聞かれた。

山田晴通(2025):青森県八戸市における「フォークジャンボリー」活動(2000年～2024年),パラゴネ(青山学院大学比較芸術学会),12, pp.1-18.